

古墳時代の印南野地域と吉備

中村 弘

1 はじめに

『播磨国風土記』（以下、『風土記』と略す）には、中央で編纂された『日本書紀』や『古事記』にはない独自の伝承が多く載せられている。本論で取り上げる「印南野」と呼ばれる地域は、明石郡、賀古郡から印南郡にまたがる地域として認識されており、『風土記』には、ナビツマ伝承と呼ばれる長大な物語伝承の存在したことが記されている。ナビツマ伝承とは、景行天皇（大帯日古命）が印南別嬢に求婚し、逃げる彼女を追いながら各地を訪問、やがては結婚するという一連の物語が中心となっており、それぞれの行為が地名起原説話となっている。高橋明裕氏はこのナビツマ伝承に対する評価として、「「印南野」の地域概念を表象する印南別嬢と景行との婚姻譚は、大王と地方豪族との婚姻関係の形式をとった中央権力―東播三郡の地域権力との関係を象徴したもの」としている⁽¹⁾。

さて、印南野を舞台にして景行天皇の後となった印南別嬢であるが、その実在性とはともかく、地名「印南」と深く関わる物語上の人物と考えられており⁽²⁾、印南地域と共に吉備に関する記載が多く見られる（表1）。

このように、播磨地域に吉備の伝承が認められることに

表1 文献に記された印南野における吉備伝承

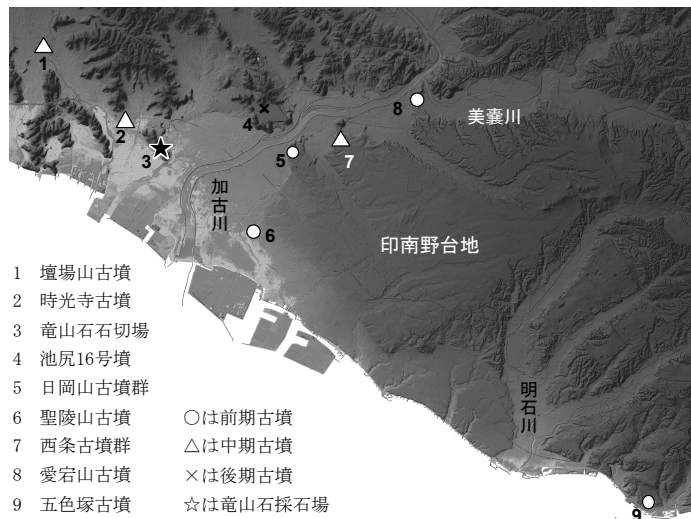
＜古事記＞
・大吉備津日子命と若建吉備津日子命が、播磨の加古川の前に「忌甕」を据えて、播磨を「道の口」として吉備国を「言向け和し」た。（孝霊記）
・大吉備津日子命は吉備上道臣の祖、若日子建吉備津日子命は吉備下道臣の祖（孝霊記）
・吉備臣等の祖、若建吉備津日子の娘が針間之伊那毘能大郎女（景行記）
＜風土記＞
・成務天皇の時、比古汝茅が国の境を定めるために派遣されてきた。その際に吉備比古と吉備比売が出迎えた。（印南郡含藝里）
・比古汝茅と吉備比売の娘が印南別嬢（同条）
＜続日本紀＞
・仁徳朝に賀古郡印南野に住む馬養造人上の祖が、吉備津彦の末裔である上道臣息長借鎌（天平神護元年<765>五月庚戌条）

ついて高橋氏は「ナビツマ伝承を王権―印南地域―吉備との歴史的な政治関係として理解」「播磨が吉備の勢力圏であったというよりも、倭王権サイドは播磨を介して吉備勢力との関係を構築したと見るべき」と理解している⁽³⁾。また、古市晃氏は5世紀段階での中央有力集団である葛城と吉備、紀伊の連合勢力の存在とその影響を重視している⁽⁴⁾。

本稿では、上記のように文献に表現された印南野地域と吉備の関係を古墳時代の考古資料を比較することで検討する。

2 印南野地域の古墳と竜山石

印南野地域は、西に加古川、東に明石川、北に美囊川の3河川に囲まれた三角形状を呈する印南野台地と、各河川によって形成された段丘と平地からなる（第1図）。その中心に位置する印南野台地は北東の雌岡山（249m）を最高所として、南西に向かって緩やかに傾斜している。台地上の遺跡は縄文時代を除くと希薄で、まさに「野」の状態であった。『風土記』において「野」と表現された土地は、①神が存在する場所、②天皇が狩りをする場所、③粟や米を生産する場所、④居住や宿泊、往來の場所、⑤山と村の中間にあたる開拓の対象地、といった特徴があり、⑥時にはそれが脅かされる場所、等の特



第1図 印南野周辺の主要な古墳と竜山石石切場

長約80m)⁽⁶⁾が前方後円墳集成編年⁽⁷⁾(以下、「集成編年」と略す)の2～3期に築造された。それ以後、周辺には前方後円墳が継続して築造され、全体で日岡山古墳群を形成している。その中の一基である南大塚古墳(前方後円墳、墳長約90m、集成編年3期)では、竜山石を加工した天井石をもつ竪穴式石槨が確認できる。また、同様の天井石が残存する聖陵山古墳(加古川市、前方後円墳?、墳長約70m、集成編年2期?)が当時の海岸に近い場所に単独で築造されている。

中期に入ると、日岡山古墳群内では大型墳が築造されなくなり、北東約2.3kmの丘陵に行者塚古墳(加古川市、前方後円墳、墳長約100m、集成編年5期)をはじめとする西条古墳群の造墓がはじまる。

また、同じころ、北西約12.5kmの台地上にも壇場山古墳(姫路市、前方後円墳、墳長142.8m、集成編年5期)が前代からの系譜がなく突如として築造される。五色塚古墳に次ぐ兵庫県下第2位の規模を誇り、竜山石製の長持形石棺が直葬され、周囲には陪塚が配置されている。壇場山古墳の築造後も山之越古墳(方墳、52m)が築かれており、同じく長持形石棺が直葬されている。これらの古墳は全体として壇場山古墳群を形成している。

こうした竜山石が石槨や石棺に使用されている大型古墳は、前期の聖陵山古墳、南大塚古墳に認められ、粘土槨が主体部である行者塚古墳には継承されず、竜山石製長持形石棺をもつ壇場山古墳、そして山之越古墳へと続いていくことになる。すなわち、日岡山古墳群の首長系列は壇場山古墳の被葬者の登場によってより大きな領域の中に取り込まれながら、新たに築造がはじまる西条古墳群へと移っていく。西条古墳群内の大型墳で最も古い行者塚古墳は、前方部がやや短く、長持形石棺が用いられず、陪塚を配しないことから、相対的な序列が下がったことを示している。その後も、帆立貝式または造出付円墳の人塚古墳、尼塚古墳へと、墳形を変え、規模を縮小していく。

終末期の大型古墳としては、加古川の西岸に築かれた池尻16号墳(稚児ヶ窟)(加古川市、方墳、一辺42m)がある。播磨最長の横穴式石室で、羨道には加工された楣石が設置されていることから、扉状の構造物が存在したと思われる。墳丘上には、長さ233cmを測る大型の竜山石製家形石棺蓋が置かれていた。当墳は『風土記』益氣里にあたり、その条文には石棺を製作した様子を示すと思われる「石を以ちて斗と平気とを作る」の記載があることから、被葬者像として終末期の家形石棺製作に関係した者が挙げられる。また、「御宅」(みやけ)を造ったと記されている点も注目される。

徴をもっている。印南野についても、同様のイメージをもつ地理的環境であったのであろう。さらに、高橋氏は「印南野が供御や狩猟にまつわる舞台であることは王権の支配観念を表象し、王権との政治的関係を表象する場であることを示すもの」という考えを示している⁽⁵⁾。

さて、この印南野地域とその周辺に築かれた古墳は、兵庫県内でも前期から後期まで比較的大型の古墳が分布する地域として知られている。前期古墳としては、先に触れた印南別嬢の墓と伝承されるひれ墓古墳(日岡山古墳、加古川市、前方後円墳、墳

このように印南野地域周辺の大型古墳には、竜山石が石槨や石棺として採用されている点が特徴的であり、その竜山石の石切場は印南野地域の西側に接して存在している。その中で壇場山古墳が登場した画期は大きく、立地は律令期の古代山陽道に面した台地上であり、後の国府推定地にも近い点が注意される。

3 竜山石製石棺と石見型埴輪

古墳時代における印南野地域と吉備の関係を検討するにあたり、両地域に共通して認められる特徴的な考古資料として、竜山石製石棺、石見型埴輪を取上げて検討する。その中で、石棺については倉林眞砂斗氏⁽⁸⁾の、石見型埴輪については和田一之輔氏⁽⁹⁾、春成秀爾氏⁽¹⁰⁾、尾上元規氏⁽¹¹⁾の研究成果に負うところが大きい。

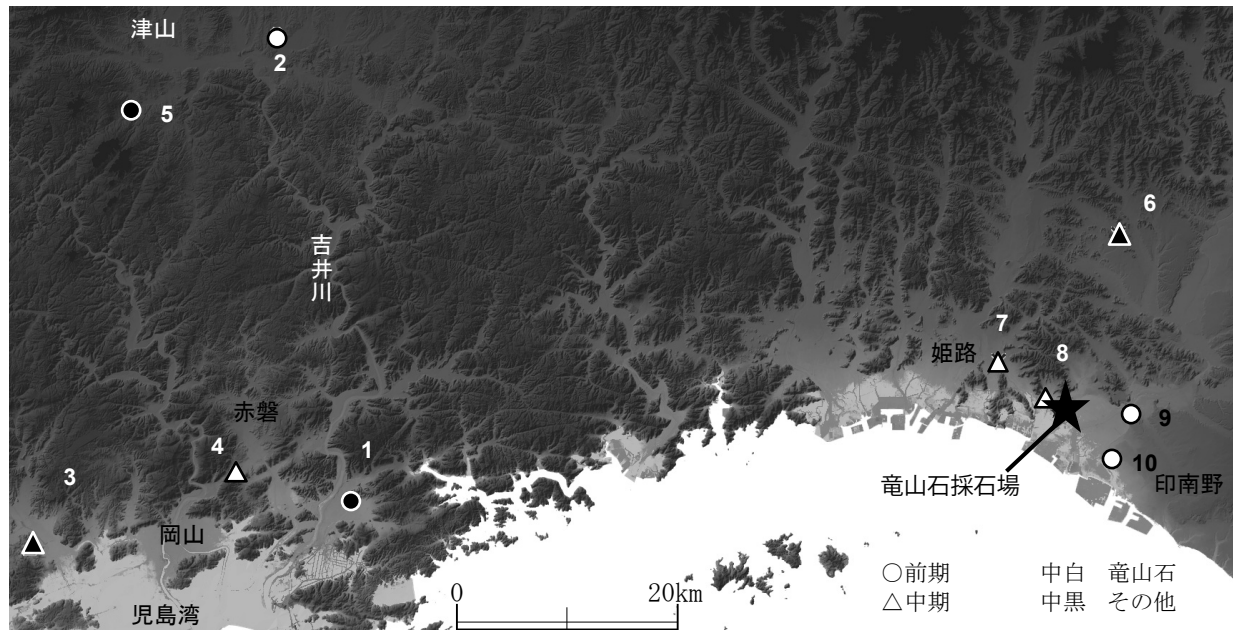
(1) 竜山石製石棺

長持形石棺 古墳時代中期の竜山石製石棺は、一部の舟形石棺を除いて主に長持形石棺が生産され、流通している。古記録などの記載から、大王墓において長持形石棺が使用されたと推定できるものもあるが、現在は石棺を直接観察することができないため石材は不明と言わざるを得ない。しかし、周辺に散在する石槨天井石が竜山石であることや、現在確認できる大型前方後円墳で採用されている長持形石棺の多くが竜山石製であることを考慮すると、大王墓の長持形石棺についても竜山石製である可能性は高い。このような大王墓や大規模古墳での使用状況、石棺型式、石材の共通性から、その生産、配布には倭王権の関与したことが考えられている⁽¹²⁾。

さて、竜山石の生産地（加古川下流域、加古川市～高砂市）に最も近い中期の大型古墳としては、先に挙げた壇場山古墳が挙げられる。産地から約7km北西に離れた場所で、集成編年5期に築造され、長持形石棺が後円部の中心からやや偏った場所に直葬されている。さらに周辺には、陪塚である櫛之堂古墳（第2古墳、径30m程度の円墳か?）、次期首長墓とされる山之越古墳（第3古墳、方墳約50m）があり、共に長持形石棺の使用が確認できる。他にも、異なる個体と考えられる長持形石棺の破片が数kmの範囲に散在しており、長持形石棺が集中する地域であるのと同時に、陪塚である櫛之堂古墳においても使用されているのは、中央政権の石棺配布原理に規制されない、生産地独自の石棺配布原理の存在を示しているといえる。しかし、いずれも竪穴式石槨を伴わない石棺直葬である点においては、明確な棺槨採用の規制のもとで古墳が築造されていることは疑いない。

一方、吉備における長持形石棺は、定型化したものではないが前期から認められる。竜山石製ではないが、花光寺山古墳（瀬戸内市、前方後円墳、86m、集成編年2～3期）の石棺は長側石や天井石に縄掛突起を造り出しており、長持形石棺の形態に近い。また、奥の前1号墳（津山市、前方後円墳、墳長66m、集成編年3期）の石棺は、一方の短側石内面の中ほどに二つの乳頭状突起が横に並んで造り出されており、玉丘古墳の長持形石棺に認められる特徴と共通している。竜山石製の石棺はそれより遅れて正仙塚古墳（津山市、前方後円墳、墳長56m、集成編年3～4期）で認められ、組み合わせ方法、丸みをもった天井石などの長持形石棺の特徴をもつが、縄掛突起や短側石の方形突起を持たないといった差異も認められる。

このように古墳時代前期の段階では、吉井川下流に長持形石棺と関連のある石棺が認められ、さらに上流にあたる美作の津山盆地において、竜山石製の石棺や関連する石棺が認められている。いずれも未



- 1 花光寺山古墳、2 正仙塚古墳、3 造山古墳所在、4 朱千駄古墳、5 奥の前1号墳、6 玉丘古墳、
7 壇場山古墳、8 時光寺古墳、9 南大塚古墳(日岡山古墳群)、10 聖陵山古墳

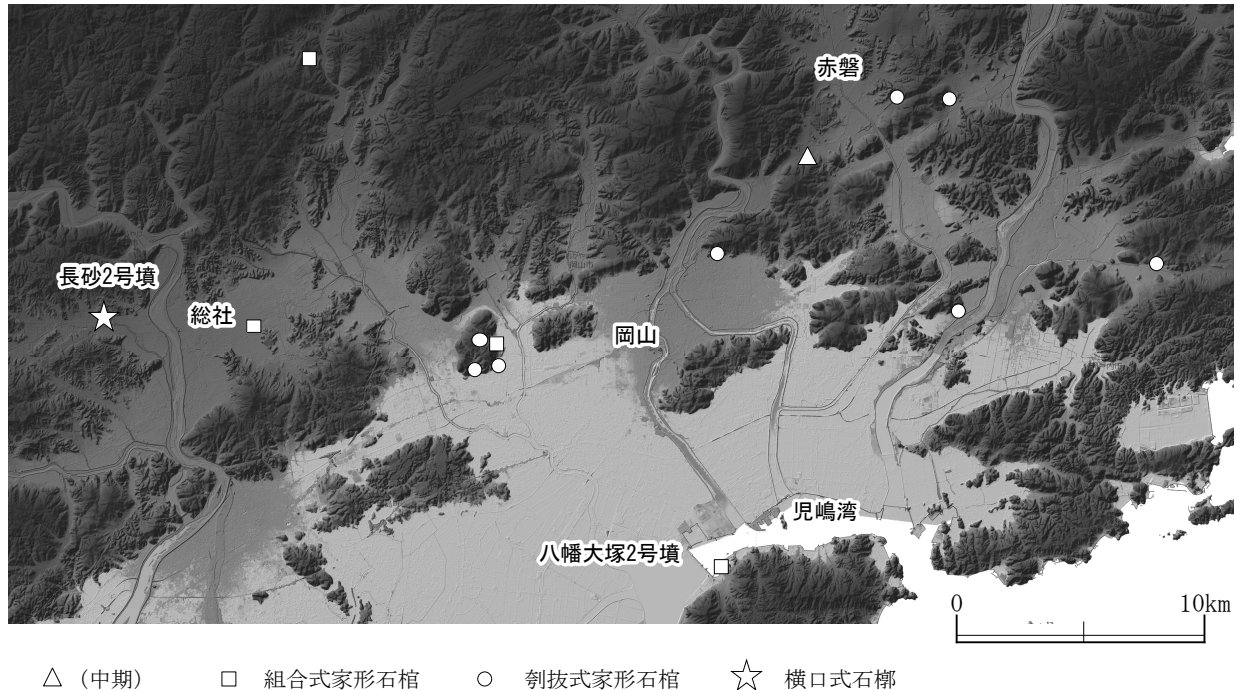
第2図 関係石槨・石塚分布図(前・中期)

定型であるが、石槨の流通としては比較的早い段階から、吉井川を中心とした地域と印南野地域の交流の存在がうかがえる。

中期段階では、吉備と印南野地域の関係を考える上で重要な石槨が、備中にある造山古墳(岡山市、前方後円墳、墳長350m、集成編年5期)の前方部墳頂に所在する。身の形態は長持形石槨を模した刳抜式で、蓋は家形で直弧紋の装飾があり、石材は阿蘇石である。出土した古墳が特定できず、さらに舟形石槨か長持形石槨かによって型式学的な時期の特定も困難であることから、石槨の製作時期は集成編年5期～7期まで諸説ある。発注者(吉備)側の依頼に基づき、採石地(肥後)で長持形石槨を意識して製作され、造山古墳の周辺に供給されたものであろう。造山古墳の陪塚には、肥後型の横穴式石室で、肥後から運ばれた天草砂岩製の石障をもつ千足古墳⁽¹³⁾もあることから、いずれも造山古墳周辺と九州地方との関係の中で製作され、運ばれたものであろう。先にみたように、播磨では陪塚にまで長持形石槨を使用することができる独自の配布原理が通用していたが、造山古墳は畿内の大型古墳にも引けを取らない規模をもつにもかかわらず、造山古墳周辺にまで竜山石製の長持形石槨を運ばせることができなかった。それは、造山古墳と壇場山古墳に表象される、吉備と播磨の地域政権間に強固なつながりがなかったためと考えられる。

吉備における中期の竜山石製長持形石槨は、朱千駄古墳(赤磐市、前方後円墳、墳長85m、集成編年8期)⁽¹⁴⁾にあり、備前にあたる。当時の地域最大である両宮山古墳(赤磐市、前方後円墳、墳長206m、集成編年7期)の南西約700mに位置し、竜山石製の長持形石槨としては最終段階で、かつ最も西側に運ばれたものである。両宮山古墳の南東約700mに位置する小山古墳(前方後円墳、墳長55m)は朱千駄古墳の直後の築造と考えられているが、石槨は阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石槨であり、肥後産の石槨が継続し、その中で竜山石製の石槨も使われている。

このように、中期段階では、造山古墳・作山古墳から両宮山古墳へと、首長墳が備中から備前に大き



第3図 備前・備中における竜山石製石棺分布図

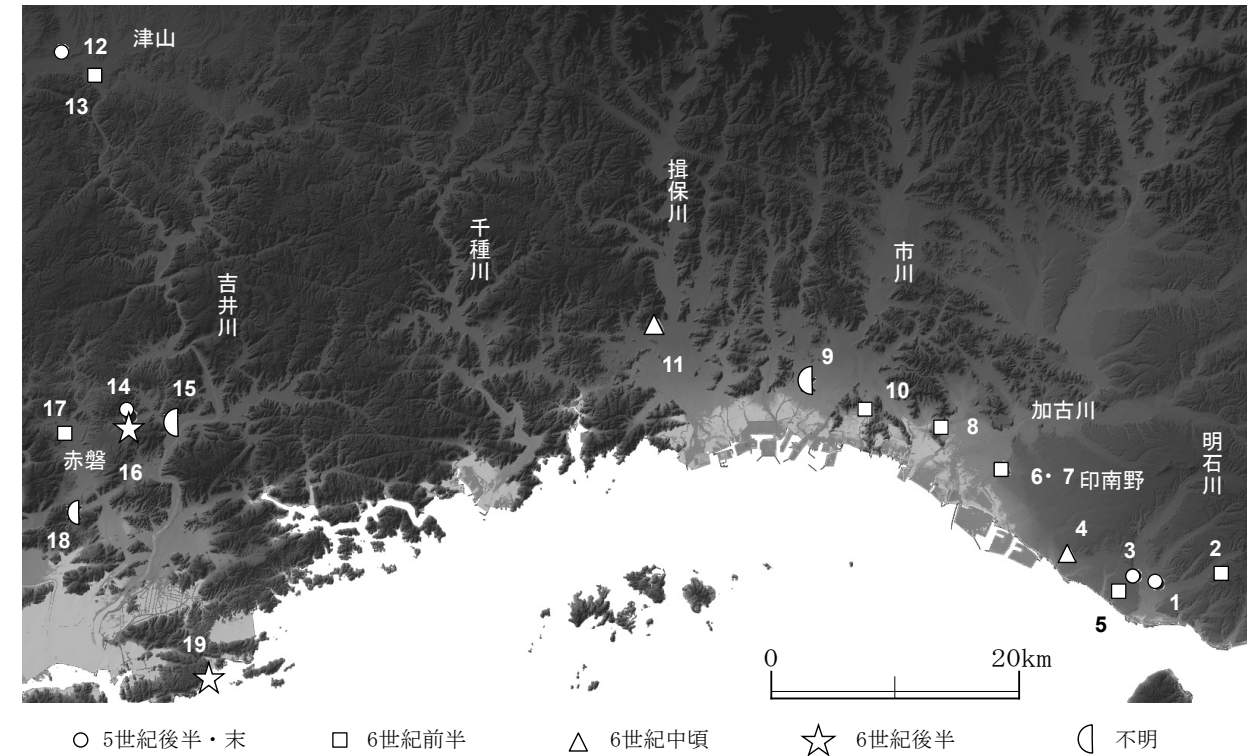
く場所を変えて築造されており、竜山石製長持形石棺は備前の両宮山古墳に近い朱千駄古墳に使用されている。集成編年7期に地域の枠組みが大きく変容し、その中で石棺が運ばれた結果であろう。

家形石棺 竜山石製家形石棺は、地元の加古川下流域を中心に山口県から滋賀県まで約500基が確認されている⁽¹⁵⁾。本来の場所から移動しているため、属する古墳が明らかな例は少ないが、時期は型式学的にみて終末期に属するものが大半であろう。備前・備中における竜山石製の家形石棺も、後期に属する八幡大塚2号墳（岡山市、円墳、径35m？、集成編年10期）が古く、それ以外は終末期に属すると考えられる。分布範囲は南部の児島湾周辺と、湾に流れ込む河川の流域に多いが（第3図）、唯一の例外は、高梁川流域の長砂2号墳（総社市）の横口式石槨である。竜山石を使用した横口式石槨は、播磨の石の宝殿（高砂市）を除けば他に知られておらず、発注者の意向で特別に製作されたと考えられる。

吉備では、大型の横穴式石室の石棺には主に浪形石（井原市産出）が使用されており、竜山石が使われることはなかった。時期的にも安芸より遅れており、後期から終末期になってから児島湾周囲に分布するようになる。そして、特注品の横口式石槨が備中にまで分布するようになることから、これまでとは異なる新たな竜山石製石棺の流通システムが存在するようになったものと考えられる。

(2) 石見型埴輪

石見型埴輪は近畿地方から西日本を中心に分布する埴輪で、6世紀前半の盛行期には、畿内地域、紀ノ川河口域、吉井川流域、そして印南野周辺に集中する。大王墓や盟主的な首長墓には採用されず、主に中小規模の古墳に樹立されており、中央政権の中小首長層の動向を鋭敏に反映しているとして政治的な背景が想定されている。さらに、「中央政権は対韓半島交渉の役割を担う中小首長層相互の紐帯を示す器物としての意味を石見型埴輪に付与した可能性」が考えられ、「中央政権が示した緩やかな枠組みのなかで中小首長層が相互にもった交流を通じて、石見型埴輪は畿内地域および西日本に展開していっ



地域	番号	遺跡名	所在地	時期	備考
播磨	1	高津橋大塚古墳	神戸市西区	5世紀末	
	2	柿谷1号墳		6世紀前半	
	3	亀塚古墳		5世紀末	
	4	寺山古墳	明石市	6世紀中頃	
	5	藤江中尾古墳	加古川市	6世紀前半	
	6	坂元遺跡(窯跡)		6世紀前半	窯跡
	7	坂元遺跡(古墳?)		6世紀中頃	
	8	魚橋	高砂市	6世紀前半	採集
	9	手柄山周辺	姫路市		採集
	10	見野長塚古墳		6世紀前半	
	11	西宮山古墳	たつの市	6世紀中頃	
備前	12	十六夜山古墳	津山市	5世紀末	
	13	日上畝山古墳群		6世紀前半	
	14	前内池1・4号墳	赤磐市	5世紀後半	
	15	円光寺遺跡			
	16	土井遺跡		6世紀後半	窯跡
	17	二塚1号墳	岡山市	6世紀前半	
	18	玉井山相遺跡			
	19	二塚山古墳		6世紀後半	

第4図 播磨・吉備における石見型埴輪出土地

た」と評価されている⁽¹⁶⁾。

吉備と播磨における石見型埴輪の分布状況を図示した(第4図)。吉備においては、5世紀後半から6世紀後半にかけて、吉井川流域の備前と美作にそれぞれ分布の中心があり、備中からは出土していない。多くは石見型埴輪の盛行期とされる6世紀前半～中頃(MT15～TK10型式期)に属している。

播磨地域においても、6世紀前半～中頃の盛行期に属す例が多い。分布としては印南野地域の南側、特に東側の明石川流域にまとっており、また窯跡と消費地が印南野西側の坂元遺跡において確認されている。高砂市魚橋から採集されたものは古墳か窯跡か不明である⁽¹⁷⁾。西播磨では西宮山古墳(たつの市、前方後円墳、墳長35m)が唯一知られている。当地は野見宿祢伝承が残る場所でもあり、出雲とは美作道を通じた交通が考えられることから、美作に分布する石見型埴輪は備前を経ない、西播磨との関係が反映している可能性も考えられよう。

4 古墳時代の印南野地域と吉備

播磨地域全体をみると、古墳時代前期には権現山51号墳（たつの市、前方後方墳、墳頂43m、集成編年1期）から吉備系の特殊器台形埴輪と古い段階の三角縁神獣鏡が出土しており、播磨西部においては吉備系と畿内系の両方が共存する形で古墳時代が幕開けたことがうかがえる。その一方で、同じたつの市でも龍子三ツ塚2号墳や姫路市丁・瓢塚古墳からは山陰系の特殊土器が出土している。このような山陰系の土器が出現期の古墳に認められるのは、摂津の西求女塚古墳（神戸市）においても同様で、ここでも古い段階の三角縁神獣鏡が出土している⁽¹⁸⁾。また、中播磨や西播磨周辺の集落からは讃岐系の土器の出土が目立ち、さらに讃岐と播磨の前方後円墳の墳形の共通性も指摘されている⁽¹⁹⁾。印南野地域では当該時期の調査例が少ないために明らかではないが、播磨の各地がそれぞれ吉備、山陰、讃岐といった各地と個別に関係をもつ中で古墳時代の始まりを迎えている。

印南野地域における吉備系の資料としては、古墳時代前期でもやや新しい段階の聖陵山古墳（既出）から出土したと伝えられる定角式銅鏃が挙げられる。高田健一氏によると、定角式銅鏃は刃部長の比率が大きい長鋒タイプと小さい短鋒タイプに分けることができ、聖陵山古墳出土の銅鏃は短鋒タイプで、妙見山古墳（京都府）から出土した1点を除くと、すべて吉備を中心とした山陽地域にのみ見られ、地域的な特徴を備えたものである可能性が指摘されている⁽²⁰⁾。また、先に記したように、印南野地域西側で産出される竜山石製石棺が前期には美作でのみ認められる。

中期になると、備中には造山古墳が築造されるが、その近辺で使用されたであろう石棺は長持形石棺を指向した阿蘇石の刳拔式石棺であり、竜山石製石棺の分布からは吉備と印南野地域との関係は認められない。ところが、造山古墳・作山古墳から両宮山古墳へと大型墳が備前へ移動すると、そこに竜山石製長持形石棺をもつ朱千駄古墳が築造される。両宮山古墳の性格付けが重要であるが、朱千駄古墳の時期が雄略の死後に行ったとされる星川皇子の反乱伝承⁽²¹⁾の頃で（『日本書紀』雄略天皇紀23年8月7日条）、反乱以後、吉備は領有する山部を奪われ、勢力が衰退し、倭王権の影響力が強くなったとされている。竜山石製の石棺が流入することになったのは、乱後の措置として吉備が畿内政権に属していた印南野地域と同列になったためといえるかもしれない。倭王権、吉備、印南野の関係は、石見型埴輪にうかがえるように、5世紀後半から6世紀中頃にかけて、特に備前から美作において継続している。

終末期には、竜山石製石棺が児島湾周辺に分布する。『日本書紀』欽明天皇17年（556）7月己卯条には蘇我稲目が派遣されて児嶋屯倉を設置したとあるが、その後になって、安芸に遅れてようやく竜山石製家形石棺が認められるようになる。最終的には長砂2号墳の横口式石槨という特注品さえ存在しており、これまで印南野地域と関連性がうかがえなかった備中にまで分布範囲が広がることとなる。

5 おわりに

古墳時代前期の播磨において、吉備系資料は複数の他地域系資料の一つとして認められ、印南野地域では聖陵山古墳の銅鏃、美作では竜山石製石棺が存在した。その後、備中から備前に大型古墳が移り、中期末には印南野と備前の両地域に共通する畿内系資料（竜山石製石棺・石見型埴輪）が認められるようになる。一方、文献には播磨と吉備の国境が加古川にあり、星川皇子の乱後に吉備の山部が奪われたことが記されている。こうした文献の記述と考古資料を合わせて考えるならば、吉備の勢力が加古川にまで及んでいたとするよりも、畿内の影響が印南野地域まで強く及んでいたのが、中期末以降になってそれが備前・美作にまで広がっていった様子を表わしているのではないだろうか。そして、終末期には

備中にまで及んだものと考えられる。

印南野地域は畿内系の影響が強い地域であり、吉備と倭王権の間にあって、まさに山陽道の「道の口」にあたることから、印南野地域と吉備の関係を具体的に把握することは倭王権の地域社会進出を考察する際に重要な視点を提供するものと考えられる。しかしながら、今回検討した考古資料からうかがえる事象が、古記録に記されたような政治的側面を表象するものか、あるいは文化的側面のみを表象するものか、分けて考えなければならない部分もある。石棺や埴輪などを同列に扱った問題もあり、さらに、西播磨と吉備、印南野地域の比較も残されている。今後の課題としておきたい。

※図はいずれも地理院地図を利用した。

【註】

- (1) 高橋明裕 2017「『播磨国風土記』からみた東播・西摂地域と交通－印南野の歴史的位置」『ひょうご歴史研究室紀要』創刊号、高橋明裕 2020「『播磨国風土記』の印南別嬪伝承からみた印南野」『ひょうご歴史研究室紀要』第5号
- (2) 註1に同じ
- (3) 註1に同じ
- (4) 古市晃 2016「ヤマトとハリマー風土記の政治学」『播磨国風土記 はりま1300年の源流をたどる』播磨学研究所編、神戸新聞総合出版センター
- (5) 註1に同じ
- (6) 清喜裕二・横田真吾 2011「景行天皇皇后播磨稻日大郎姫命 日岡陵の墳丘外形調査」『書陵部紀要』第63号、宮内庁書陵部
- (7) 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』近畿編を参考とした。
- (8) 倉林眞砂斗 2005『石棺と陶棺』吉備考古ライブラリ12、吉備人出版
- (9) 和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』53-3、考古学研究会
- (10) 春成秀爾 2012「寺山古墳の石見型埴輪」『明石の古墳Ⅱ』発掘された明石の古墳展実行委員会
- (11) 尾上元規 2019「埴輪と陶棺の生産」『両宮山古墳以後－古墳時代後期の赤磐と倭王権－』岡山県赤磐市教育委員会
- (12) 和田晴吾 1996「大王の棺」『仁徳陵古墳』大阪府立近つ飛鳥博物館図録8、大阪府立近つ飛鳥博物館
- (13) 白石純・草原孝典・西田和浩 2012「千足古墳石室石材の産地推定」『岡山市埋蔵文化財研究センター研究紀要』第4号
- (14) 正仙塚古墳（美作市）にも竜山石製とされる定型化以前の長持形石棺が存在するが前期にさかのぼる。定型化し、大王墓に採用される以前のもので、その意義は定型化以後のものと異なると考えられる。
- (15) 兵庫大会大会実行委員会 2010『日本考古学協会 2010年度 兵庫大会 研究発表資料集』
- (16) 註9に同じ
- (17) 高砂市史編さん専門委員会 2007『高砂市史』第四巻史料編、高砂市
- (18) 神戸市教育委員会 2004『西求女塚古墳 発掘調査報告書』
- (19) 岸本道昭 2013『古墳が語る播磨』神戸新聞総合出版センター
- (20) 高田健一 1997「古墳時代銅鏝の生産と流通」『待兼山論叢』史学篇、大阪大学文学部
- (21) 『日本書紀』にみえる星川皇子の反乱伝承。星川皇子は雄略天皇と稚媛（吉備上道臣の娘）の子で、雄略天皇23年、天皇の死後、吉備上道臣一族の支援の元で皇位継承をめぐり反乱を起こした。吉備の有力首長の軍事力を背景に王権の篡奪を図るという反乱伝承であり、乱の鎮圧後、清寧天皇は上道臣支配下の山部を取り上げたとされる。